巻頭エッセイ

Opening Essay

語学は世界への入り口

村治佳織　Muraji Kaori

23歳のときに，スペインでギター演奏のDVD撮影をする機会がありました。せっかく映像に残るものなので，スペインの生活のにおいを自分の中にしみこませてから演奏したいと思い，撮影前の1ヶ月半の間，スペインの一般家庭にホームステイしながら語学学校に通うことにしました。

ホームステイ初日，スペイン語がほとんどわからない私に，ホストマザーはスペイン語しか話さないし，ホストシスターも，初対面の私に愛想笑いどころか，人目もはばからず彼氏と電話で大ゲンカ。感覚の違いにカルチャーショックを受けましたが，これぞ異文化体験。よし，がんばろうと思いました。

語学学校の授業もすべてスペイン語です。語学学習の達人である赤ちゃんをイメージして，どうやったら早く定着するか，自分でいろいろと考えました。わからなくても，とにかく授業を聞いて，家に帰ってからしっかり復習をする。目に入ったものを瞬間的にスペイン語で言ってみる。考えるときにも日本語を介さずにスペイン語で考える練習をしました。

それまで学んでいた言語といえば，中高で勉強した英語と，フランスの音楽学校に2年間留学したときのフランス語。どちらかというと，学ばなければならない状況で学んでいましたが，今回は違います。学ぶ姿勢が違うと，出会う人に対する姿勢や自分の行動も違ってきます。おかげで，英語・フランス語に比べて，スペイン語は速く上達しました。

語学は，楽器の演奏と似ているところがあります。楽器を演奏するときには，テクニックと表現力の両方が必要です。テクニックだけだと心がないと言われる場合もありますし，心や感情をうまく表現するにはテクニックが必要です。語学も同じで，文法（テクニック）の正確さばかりに気をとられると，せっかくのコミュニケーションがぎこちなくなってしまう。でもしっかりと話そうと思うと文法も大切。だから，ホームステイ先で家族と話すときは，間違ってもいいから習ってきたことを使って楽しく会話し，あとで文法を確認するようにしていました。スペインでのこれらの経験は，語学を学び，異文化を感じるいい経験になりました。

スペインや他の国々で異文化と出会うなかで，国や地域，そこで生きる人々や文化は一括りにできないと思うようになりました。日本にいると，「日本は」「スペインは」などとイメージを大きく捉えて話をしてしまいがちですが，実際にその土地へ行ってみると，もっと細かい要素が重なって，その街ができ，国ができているのだと感じます。人に関してもそうで，一人ひとりを知ると，一言で「スペイン人」では括れない。知れば知るほど多様性を感じます。

最近は海外に行ってみたいという若者が減ってきていると聞きました。国内にいてもたくさん情報が入ってくるので，それで満足しているのかもしれませんが，それが私にはもどかしく感じます。実際に自分の目で見たもの，聞いたこと，食べたものが，最終的には自分の中に残っていくのだと思うからです。世界へ出れば，違う文化に生きる同時代の人たちに会うことができます。100年後にはこの世にいるほとんどの人が違う人なのだと思うと，どんな出会いもすばらしい。若者たちにとって，語学は世界への入り口であってほしいと思います。

むらじ　かおり

東京都出身。ギタリスト。3歳からギターを始め，様々な国際コンクールで優勝ののち，15歳でデビュー。国内外のオーケストラとの共演も果たす。現在は演奏活動のほか，テレビ・ラジオ・雑誌などでも活躍。NHK「テレビでフランス語」に出演中。